

2019年7月28日（日）「予備の油」

マタイ 25:1-13

1 そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。2 そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。4 賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。5 花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。

6 ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声がした。7 娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。8 ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』9 しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはどうも足りません。それよりも店に行き、自分のをお買いなさい。』10 そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。

11 そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください』と言った。12 しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません』と言った。13 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。

#### 【序論】

今日から 25 章に入ります。前回もお伝えしましたように、この章は 3 つの主イエスの譬話によって構成されていますが<sup>1</sup>、これらには一貫したテーマがあります。それは、「主の再臨に備えて生きよ」という 24 章から引き継いだテーマです。このテーマが 3 つの譬によって立体的に説明されているのです。私たちは主の再臨に備えるため、どのような生き方をしていなくてはならないか。とは申しましても、人間の霊的な状態というのは目に見えませんが、実は自分でもよく分からない面がある。客観的に第三者から見た方が分かる場合もあるでしょう。今、自分は霊的にどういう状態にあるのか。そのことを見極める助けになる教えだと思います。マタイ福音書は主イエスの 5 つの教えを軸に構成されていますが、最後の教えの最終段階に差し掛かりました。心して耳を傾けてまいりましょう。

<sup>1</sup> ①25:1-13 花婿を待つ 10 人の乙女の譬

②25:14-30 タラントの譬

③25:31-46 羊と山羊の譬（寓喩または直喩）

## 【本論】

### 本論 1. 花婿が来る前

そこで、天の御国は、たとえば言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。(25:1-5)

「天の御国の譬」は13章にまとめて出てきたのを覚えていらっしゃるでしょう<sup>2</sup>。ここに来て、主イエスは再び「神の国」の真理を教えるために譬話を用いられます。まず「花婿を出迎える十人の娘」。結婚式というのは、もちろん弟子たちにとって馴染み深いものでした。当時の結婚式の事情は、現代日本のそれとは随分と様子が異なります。まず、男女共に両親が子どもたちの結婚の約束を取り交わします。それから婚約式を行ないませんが、これは既に「夫婦になった」という契約を意味する。しかし、二人と一緒に生活を始めるのはその約1年後で、この期間両者は貞操を守り、結婚生活の備えをします。

さて、今日のストーリーは実際の婚宴の場面です。当時の結婚式事情を説明しておきたいと思いますが、これがなかなか面倒臭いのです。結婚式は夕刻から始まりますが、花婿は先立って花嫁の両親の家に行き、花嫁料などに関する最終的な話し合いをします。花嫁の両親との協議が終わると、花婿は花嫁を連れて、一旦自宅(会場)に戻ります。この時間帯に花嫁の友人たち(★今日の譬話に登場する「十人の(未婚の)娘」)は花嫁の家を集結するらしい。そして、花婿は自分の友人たちを家に招きます。その後、二人は花婿の友人たちを伴って、花嫁の家にもう一度向かい、今度は花嫁の友人と顔を合わせます(★今日の箇所で起きる事件は恐らくここ)。美しく着飾って待機していた花嫁の友人たちは、花婿の友人たちの音頭によって、花婿と花嫁を会場(花婿の自宅)へ導いて行きます。もう夕刻ですから、その行列は松明で照らされ、道沿いの家々の屋上から、花嫁の美しさを称える祝いの言葉が投げかけられます。一行が会場に到着すると、

---

<sup>2</sup> 13:3-23 種蒔きの譬  
13:24-30 毒麦の譬  
13:31-32 からし種の譬  
13:33 パン種の譬  
13:44 畑に隠された宝の譬  
13:45-46 良い真珠を探す商人の譬  
13:47 地引網の譬

盛大な宴会が開かれ、約一週間かけて、歌と踊りと酒によってお祝いがなされました。

先ほども説明しましたように、「十人の娘」というのは花嫁の友人のことでしょう。彼女たちの役割は、暗い夜道、一向の行進を照らすことでしたから、松明を用意していなくてはなりません。当時の松明というのは、棒の先に油に浸したぼろきれをくりつけたもので、15分置きに油を補充しなくては火が消えてしまうようなものでした。だから、松明とは別に、油の入った器を用意しておくべきだったのです。10人の乙女のうち、5人は賢く、5人は愚かであったと言われます。両者の賢愚を分けるのは、予備の油を持っているか否かです。

花婿・花嫁・花婿の友人たちの到着を待っていた娘たちですが、何らかの事情で遅れていたのでしょう。待てど暮らせど来ないので、ついうたた寝を始めてしまいます。ここでは、居眠り自体が悪いとは言われていません。肉体的な疲れから、致し方ないことだったのでしょう。問題は、予備の油を持っているかどうかです。今なら、遅刻する場合、すぐにスマホで連絡を取り合い、こうこうこういう事情でどれくらい遅れるということをお伝えられます。しかし、当時は携帯などというものはありません。それに、これはあくまでも譬話であって、ここに登場する「花婿」なる人物は、結婚式の一切の権限を握っているようなのです。この花婿に暗示されるのは、まさしくキリストであり、婚宴とは終末的な神の国における祝宴です。よって、通常の地上の婚宴とは意味が違うということを、読者はよく理解しておかなくてはなりません。普通ならあり得ないことが、この婚宴では平気で行なわれていく。「十人の娘」とは、再臨のキリストを待ち望む教会であり（何も10の教会に限定される訳ではありません）、更に言えば、教会生活を送っている信徒一人一人を表します。5人、5人と二分されているのは、一つの教会、一人の人間のうちに、賢さと愚かさの両面が併せもたれていることを言い表しているでしょう。誰一人としてこれを例外として読むことはできないのです。

## 本論2. 花婿が来た時

ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声がした。娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行き、自分のをお買いなさい。』そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼と一っしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。(25:6-10)  
だいぶ遅れて花婿が到着しました。この遅延は、キリストの再臨がすぐには訪れないこ

とを表しているようです。しかし、その時は確かにくる。「**そら**（原文では「見よ）」、**花婿だ。迎えに出よ**」と叫んだのは、花婿の友人の一人かも知れません。眠っていた娘たちはガバッと飛び起き、慌てて身支度をしました。どうも、眠っている間にもともしびは燃え続けていたようで、予定通りの時間に花婿が来たのであれば、誰も困ることはなかったのです。ところが、ここにきて10人の娘の賢愚が二分されていきます。「賢い娘たち」は、いざという時のために油を余分に用意しておいたので、眠りから醒めた時、油の量は減っていたのですが、補充することができました。一方、「愚かな娘たち」は万が一の状況を想定していなかったため、時間通りの分しか油を用意しておらず、眠りから醒めた時にはこれからの行進を導くには足りない量にまで減っていました。慌てた「愚かな娘たち」は、「賢い娘たち」に油を分けてくれるよう頼むのですが、けんもほろろに断られてしまいます。もう花婿は着いてしまった。すぐにでも行進は始まっていく。悠長なことを言っている場合ではないし、もし自分たちの油を分けてあげたとしたら、自分たちが役割を果たせなくなってしまう。「賢い娘たち」は自分の責任にのみ集中しました。

あまりアレゴリカルな読み方は好まれないのですが、敢えて「ともしび」を信仰、「油」を聖霊と解釈するならば、各々に与えられた聖霊という賜物は誰にも分与することができないという意味になってくるでしょう。主イエスを迎えるために、信仰の火を燃やし続けるため、聖霊という油が注がれ続けねばならない。御言葉から離れず、絶えず祈り、神との一對一の交わりの中でその人生を歩んでいる必要があります。主イエスとお出会う時、私たちは誰にも頼ることはできないからです。誰かの信仰に寄りかかることはできない。審きにおいて助けを求めることもできない。自分自身の内でキリストの義を握りしめ、救いの約束を信じ、神との生き生きとした交わりをもちながら、その人生を生きていけば安心なのです。信仰的に自立するということです。

油の分与を求められた「賢い娘たち」の言っている言葉に注目しましょう。「**いいえ、あなたがたに分けてあげるにはどうも足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい**」。「自分のをお買いなさい」は、直訳すると「自分に対して買え」。つまり、自分の責任は自分で負えと言われていることになります。再臨の主とお出会う時に、私たちは個人として主の御前に立たなくてはならない。慌てて油を買いに出て行った娘たちの姿は、その信仰の火が消えてしまっていた人間が、今更のように救いを求めてうろろろする様子を表しているようです。「**御霊を消してはいけません**」(Iテサロニケ5:19)というパウロの言葉が響いてきます。そして、娘たちが油を買いに走っている間に、一行は行ってしまい、宴会は始まってしまいました。

### 本論3. 花婿が来て後

そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください』と言った。

しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません』と言った。だから、目

をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。(25:11-13)

夜の街を徘徊し、油を売っている店を見つけ、どうにか買い求めて宴会場まで走ってきた娘たちでしたが、時既に遅し…。考えてみますと、彼女たちは「行進をともしびで導く」という責任を果たしていないのです。それでいて宴会には参加しようとしている。信仰者として生きることなく、天国の門をくぐろうとする人間の姿を現しているのでしょうか。彼女たちは、夜のとばりの中、閉ざされた門を懸命に叩きます。しかし、花婿はその扉を開けてくれません。これは冷たい処遇に見えますが、花婿キリストにとっても、「時」を変えることはできないのです。再臨の前兆は十分にあったはずだ。悔い改めの機会はたくさん与えられてきたはずだ。そのために主は時を延ばしてこられた。しかし、それでも信じなかった人々、靈的に眠ってしまった人々は、実は自分自身でその道を選択してきたのです。

「目をさましていなさい」という最後のことばは、もちろん靈的に目醒めていることを意味します。肉体的に眠る時にも、人生を終える時にも、私たちは油を用意していることができる。つまり、神との交わりのうちに眠りに就くということです。怒ったままその日を終わることがないように。悔い改め、信仰告白、賛美をもって人生の日々を終えていきたいのです。

#### 【結論】

この譬話は読者に鋭い教訓を与えています。読む人一人一人の靈性に問いかけ、神との交わりのうちを生きているかどうか自己吟味を迫ります。自分は正しく生きていると思っていながら、実は神の国に生きていないということもあるでしょう。主イエスの時代のパリサイ人・律法学者はまさにそうだったのです。彼らは宗教的に正しい生き方をしていると信じ、民衆に聖書を教える立場にありました。しかし、彼らは靈的に眠っていたのです。主イエスが世に来られた時、どなたであるかが分かりませんでした。神の子を迎え、礼拝するのではなく、かえって憎み、十字架につけて殺しました。私たちの内側にも、「賢い5人の娘」と「愚かな5人の娘」がいます。この娘たちは、油の用意をしようかすまいか、常に格闘しています。「油など必要ない」という囁きに耳を傾けることなく、常に「壺を満たした」歩みを続けてまいりましょう。

## 【祈り】

再臨の主、イエス・キリストの父なる神様。繰り返し「目を醒ましていなさい」というメッセージが語られます。これは、眠りやすい私たちの霊を起こし続けようという、主イエスのご配慮です。私たちが見るべきものを見、聞くべきことを聞き、歩むべき道を歩み続けることができますように。主イエスとお出合いするその日まで、御霊によって「予備の油」を常に満たしててください。

## 【祝宣】

仰ぎ願わくは、

神の国の婚宴を用意し、ご自身の民を招き入れ給う、父なる神の愛。

地上にあつて、常に霊の目を醒まさせ、再臨の備えをなさせ給う、主イエス・キリストの恵み。

「予備の油」そのものとして、信者一人一人の心を満たし続け給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。